

ヨーロッパアルプス発

# チロル便



作：棕櫚塚絵美



(一) ああ、チロル

よろれいひ〜♪  
ここはチロル。



ヨーロッパ・アルプスの裾野を吹く風がカウベルの音を運んでくる。

耳を澄ませば、アルプスの少女ハイジのテーマ曲が聞こえてくる（いや、そんな気がする）。



口笛はなぜ〜♪  
・・・と言われましてモー

カラン  
コロン



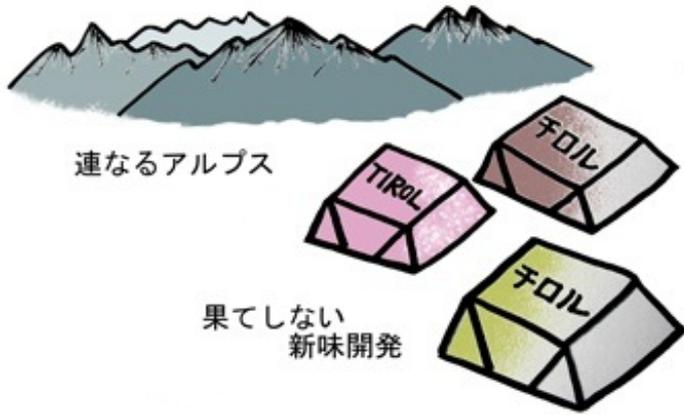
そんな場所。

大まか過ぎるオーストリア略図

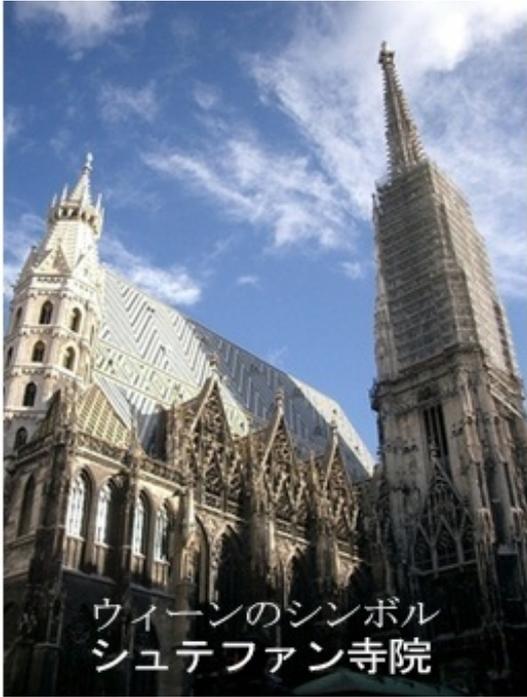


チロルに移り住み早5年！

チロルと言えばチロルチョコしか知らなかった自分が、まさかチロルに移り住むことになるうとは予想だにできなかった。



そもそも、大学時代に一年の期限付きでウィーンに留学したのが始まりだった。



初歩ドイツ語もままならぬ社会学専攻の身。一年だったら何だって我慢できる！と鞭打って送った虐げられた日々。

スズメが鳴くのはツヴィツチャン、猫はミャオエン、そんなかわいいドイツ語を見つけては心を慰めた。

そんな時期に出会ったのが、いまや夫のハンスペーター（略してハンペン）である。



ハンペンは幾何学専攻でウィーン市内の大学に勤務。  
合気道をたしなみ、普段は冷静、柔和な勤労青年。

そんな彼が、結婚して約一年後のある日、突然仕事を辞めてきた。

何でも上司と大喧嘩したらしく、そんなら辞めてやる〜！！と絵に描いたような癩癩退職。

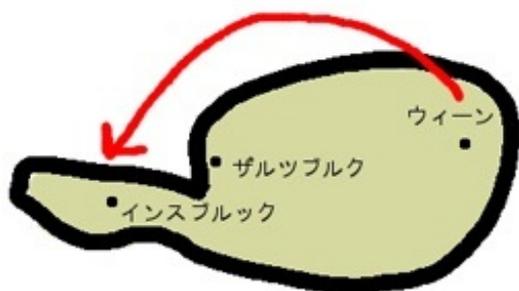


その頃私はフルタイムで働いていたのに最低賃金ぎりぎりの収入。

これじゃハンペンまで養えるわけな〜い！！

もう最悪。。。。

しかし、縁あってハンペンがチロルのインスブルック大学に再就職。今に至る。  
オーストリア横に長しとは言えど、東の端から西の端まで流れ着くとは。



げに  
浮き草の  
如し。



そんな風に始まった  
わがチロルライフ。  
移り住んだ当初は  
地の果てに来たもんだと  
悲嘆したこともあった。



しかし、住めば都！

この地に馴染んでいくにつれ、圧倒的な自然と素朴な生活にどんどん魅せられて、今やチロルのとりこ。チロルとりこ。

四方にそびえる2000m級の山々がもたらす自然の恵み。

新鮮な空気、湧き水、乳製品！



それから、厳しい自然の中で強く優しく生きている農家の人たち、ひょっこり遭遇する野生動物、ロマンあふれる旧市街など、お伝えしたいことがたくさんある。

本当は、是非チロルに来てみてほしい。

それが叶わぬなら、小文を通して少しでもチロルの風をお届けできたらな、と思うのである。

**(二) チロルのクリスマス**  
**—サンタとなまはげの関係—**



毎年12月に入ると思い出す。引っ越した当初のくらしい日々。



知る人ぞいぬ地に移り、また異国の地でゼロから始める憂鬱。

引っ越すことに決まった時、ウィーンの友達にはよく言われたものだ。

どうしてまたチロルなんかにと。

引越当日、新居に無心にダンボールを運び込んでいたら、いつしか気づいた。

「ん？」なんだか足が冷たい。

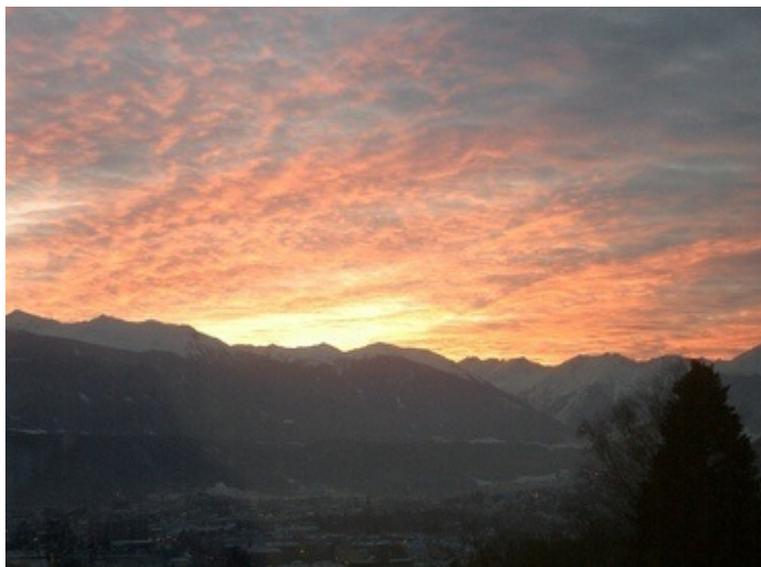
なんと家中のカーペットがずぶずぶにぬれているではないですか！

洗浄していつてくれたらしい前の店子の親切心。

ああ、でもなぜにこんなびちょびちょに・・・

途方に暮れる夕暮れ時。季節は冬。

何てったって山のふもとには日が落ちるのが早い。



それも何とか乗り切った！ハローワークにも嫌味を連発されつつも泣きながらも通った。

ホトホト疲れていた時、地元の集落でお祭りがあるという。祭り好きではあるけれど、気分は乗らず重い足を引きずってでかけた。



それが、ニコラウスの祭だった。

そのお祭りでなんと、日本人親子に出会った。

我らが新居は家賃の関係で街外れに。私がこの集落初の日本人であると固く確信していた。

それが、歩けば3分程の所にもう7年も住んでいるという何とも感じの良い日本人一家が住んでいたのだ。

この出会いで後々どれほど救われたか。



地獄に仏

彼らに会った後、私は現金にも足取りが軽くなった。祭じゃ祭じゃ。

まずニコラウス。

一見サンタクロースの本物。



東ローマ帝国の司教だった聖人だそうで、サンタ似どころか、その原型だとか。

ちょっとしたお説教をして、良い子にはナッツや果物などの小さな贈り物をくれる。



本物のニコラウス

と、ここで異変が。

先ほど会った日本の子（3歳）の姿が母と共に消えた。

見るや他の大部分の子供たちもそそくさと帰っている。

祭りは早くも終わりかと思えば、いやいや、これからです。

じゃらんじゃらんと不吉な鐘の音、うなるような低音の叫び声、奥の道から湧き出るスモーク。

ひー、ナマハゲじゃー。

しかも列をなして来るではないですか。



うりゃ—————！！！！

ニコラウスの陰の存在、クランプスのお出まし！

悪い子にはお仕置きじゃー。バシバシ（ほうき状のものを振り回す）。



さすが、洋モノは怖さが違う。



こちら、我が日本のナマハゲ。



和モノ洋モノ、どちらが怖い？

ハンペンが私を盾にして覗き見る。その頃になると私も俄然、本領発揮。  
珍しいもの大好き。観客の最前列に食い込み「こっち向いてー！」とデジカメ激写。



クランプスが思いがけず優しい手つきで私の髪をぐしゃぐしゃにしていった。  
地域によってはクランプスの無政府状態、暴行なども起こるといのが何のその。  
本格的かつ騒々しいクランプスの行列。

その後、バス停辺りで出番が終わったクランプス達がマスクを取ってくつろいでいるのを発見。興ざめだ！と私は怒ったが、ある人いわく、それもある種の演出で、「本当は人が入っていたんだよ」とクランプス行列まで残っていた果敢な子たちに安心してもらい、変な夢を見ないようにするためだ」とのことだ。

真偽はいかに？

ところでチロルでは、クリスマスツリーに贈りものを届けてくれるのは、サンタクロースではない。  
。クリストキント(幼児キリスト)が来てツリーを飾り、贈りものを置いていってくれる、ということになっている。



本物（もとい原型）が12月頭に来てしまうので、サンタの出る幕はないのである。



その分、日本の繁華街でビラを配っているのかもしれない。

～おまけ～

クリスマスに作ろう！

チロル風林檎パン



材料（一本分）

<材料A>

りんご（種の部分を除き皮ごと粗くすり下ろす） 正味250g

レーズン 25g

干しいちじく（粗く刻む） 65g

はちみつ 40g

ラム酒 小さじ1

シナモンの粉 小さじ1

ココア粉 小さじ1

お好みでナッツ類 適宜

<材料B>

小麦粉（あれば全粒粉） 125g

ベーキングパウダー 4g

作り方

○1日目

ボールに<材料A>を全て混ぜてふたをして一晩ねかす

○2日目

1) オーブンを160度に温めておく

- 2) <材料A>のボールに<材料B>を加えざっくり混ぜる
- 3) オーブンシートをひいた天板の上に生地をパンの形にして乗せる
- 4) 160度に予熱したオーブンに入れて約1時間焼いたらできあがり

※このレシピはいくつかのレシピを参考に棕櫚塚が改良したものです。  
本当に簡単で、プレゼントにしても喜ばれますよ！



(三) チロルのご近所さん<前半>

—あなたに会いたい—

それは6月のある日。

出会ってしまったんです。



玄関のドアのすりガラスに映る不思議な存在。

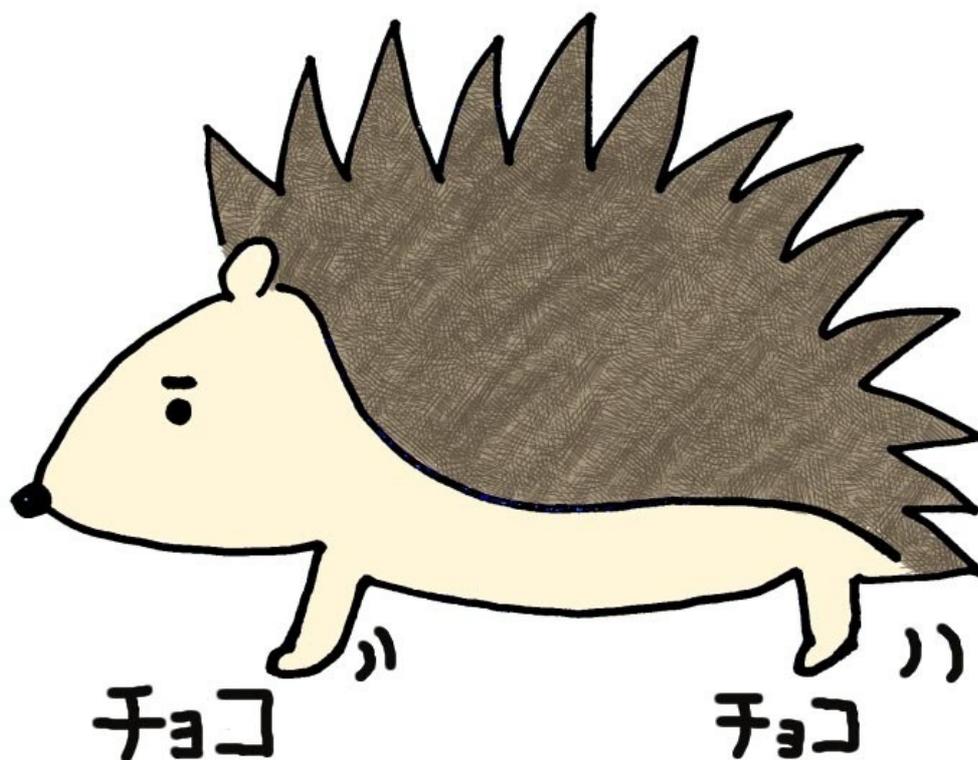
何者かがもそもそしている...

何気なくドアを開けて外に出てみると、一瞬

「ん？変わった猫だな」と思った。

...が、

# 不思議な生き物



何と、ハリネズミくんではありませんか！

生まれて初めてハリネズミを見たけれど、これがもう例えようもなく可愛い！

私の存在に気づき「ハッ」として（そのように見えた）隠れるべく、ただひた向きに前進するその姿っ。

何しろ足が短いからちょこちょこしか進まない。

この世にこんな存在があったとは。

視界から出るまで彼の行方を目で追って、半金縛り状態。  
無事に草むらの中に入った時にはなぜか彼の為にホッ。



これまで、私の中でハリネズミと言えば、絵本に出てくる動物としてだけで、実体をともなわないものだった。

しかし、一度遭遇してみれば、全身全霊で守ってあげたい、でもちょっと安易に近づけない（いかんせん針が・・・）、というようなアンビバレントで悩ましいお方だった。

ふつふつと幸せな気分が湧いてきた。

そして思った。

出会ってしまった、君無しではもう生きていけない、と。



それから数日間、いとしなあの方に「会いたい会いたい」と念じて近所を歩いた。  
しつこく歩いた。



そうしたら、何とまた会えた。



今回は、写真を撮る余裕さえあった。

今度はもう少し小さめのはりねずみ君で、掌に乗ってしまうような大きさ。  
もしかしたら、迷子の赤ちゃんかもしれない。

もー、やっぱり可愛い。

素敵でも愛らしいでもなく、やはり可愛い。

めった惚れ。



再会の場は農道。



田舎道だけど、車通りは結構ある。

「ほら、早くはじっこに寄って。森にお帰り」  
とナウシカ状態の私。

いやいや、この君、可愛いんだけど当然ながらトゲトゲつんつん。

触ったら痛いのか、ガスを出されるのか分からずオロオロ。

車が急に来たらどうしよう、と思いながらも、触れずに交通整理のおじさん風な身振り手振りで道の端に誘導。



道端まで到達した時には、再び彼の為にホッ。

別れてからしみじみと、そのいじらしげな姿を思い返す。

ああ、触ってみたい。

丸くなったお姿も見てみたい。

## あんなことも

こんなことも  
してみたい



想像図

後日、動物に詳しい友人に興奮気味にその話をしたら、「まず第一にハリネズミはガスを出さないし、針うんぬん以前にダニなんか寄生しているから触るなんて問題外！」と至極冷静に却下された。

その友人（女性）が一人暮らししていた時、裏庭で欲情したような「ぬっはあ、ぬっは〜」という低い息遣いが聞こえて、これは不審者かと身構えたら実はハリネズミだったとか。

我が家のはんぺんも、「ハリネズミぐらいでそんなに興奮して」と私の入れ込みぶりに水をさす。もしかして嫉妬？

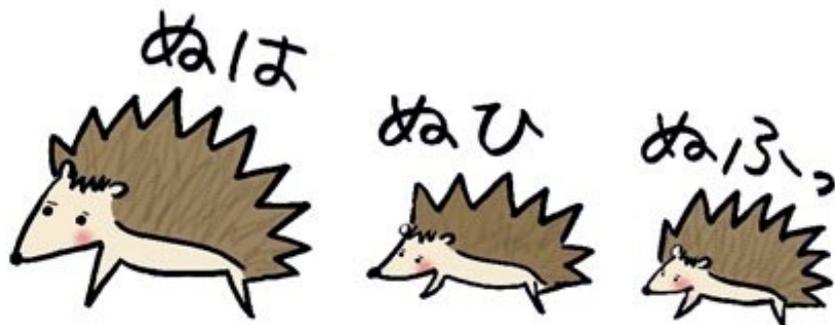
彼の実家の裏にも良く出て「ヌッフヌッフ」と怪しげな声が聞こえたらしい。

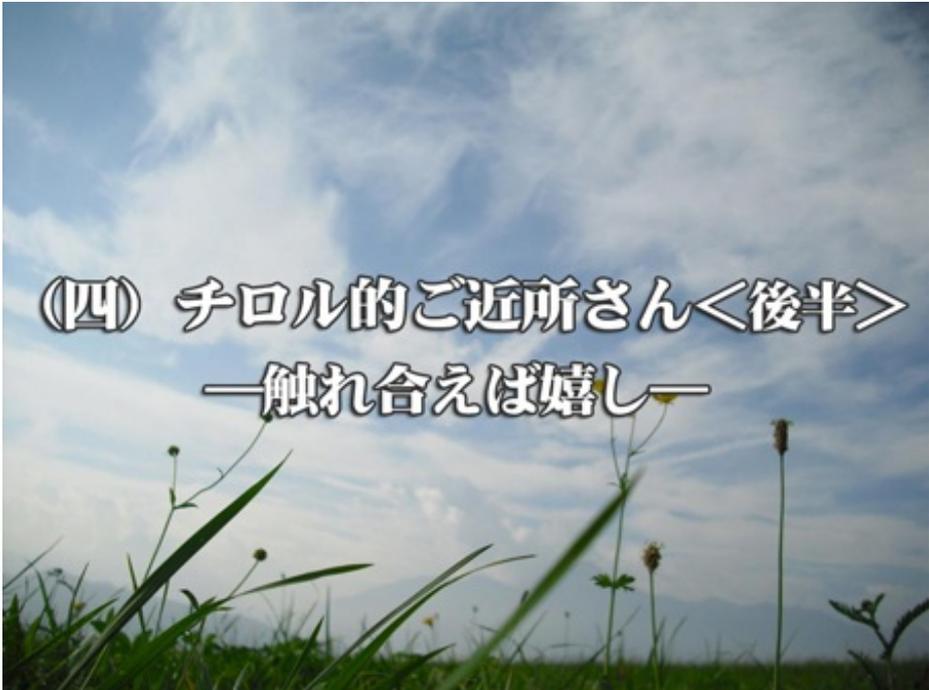


私はどんな声でも、あのお方のなら聞いてみたい。もはや、末期症状。

チロルに限らずオーストリア全域で割と頻繁に見られるらしい。

それなのに、こちらの熱烈ぶりをよそに、その後憧れの君は姿を見せてくれないのである。





④ チロルのご近所さん<後半>  
—触れ合えば嬉し—

チロルに引っ越して来てから、身近な動物がずいぶん増えた。  
いや、動物の存在が身近になったと言うべきか。



我らが住むのは街外れ。

野原を揺らすさわやかな風に混じって、何やらかぐわしい香りが漂ってくる。  
というのも、うちのすぐ裏手には羊やヤギ、牛などが放牧されているのだ。

はじめて間近で見るヤギ。

まじまじ見ると、目つきが悪くて可愛げがない。



むむむ。

が、おずおずとレンゲなどの野の花をあげると、喜んで食べてくれた！

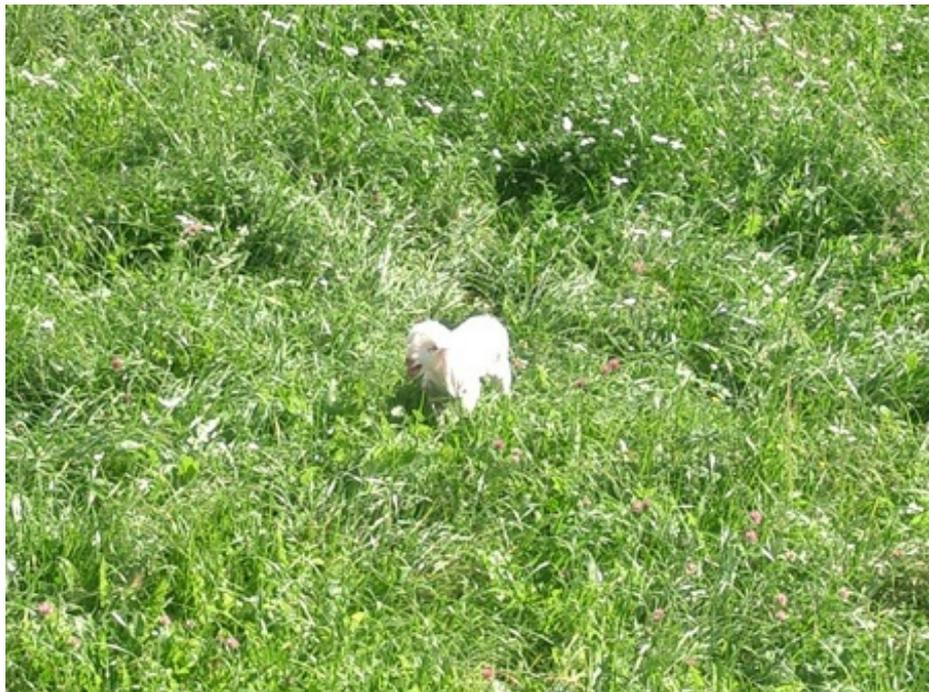


お近づきのしるし

そうになると、急に愛しくなってくる。

田舎の香水も君達の（牧草の）ためだと言うなら我慢できる、という境地にまで達した。

近所の牧草地をぶらぶら散歩していたら、羊の赤ちゃんが柵から出てしまい戻れなくなっているところに遭遇する、なんてこともあった。



迷える子羊よ

そんな時は抱えて中に戻してあげる。

もっとも、動物を抱えるなんて慣れないことで、親羊からのメーメー非難もあるし、こわごわへっぴり腰であるが。



すりすり。ぴとー。

森の散歩道を歩いているとリスに会う。



散歩している馬もいる。



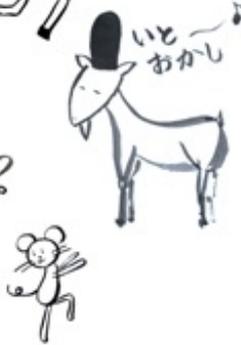
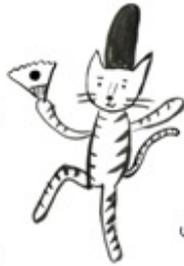
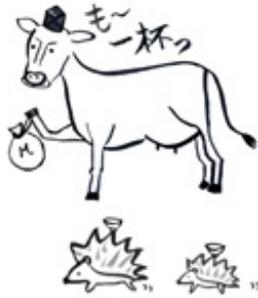
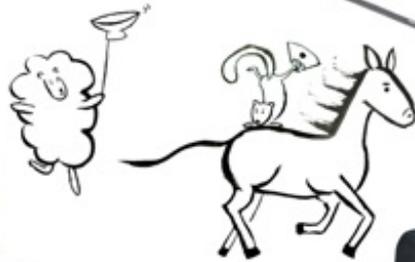
仔馬はまつげが長くたてがみがカールしているという発見

極たまにだが、鹿も見かける。

まさに、動物園いらず。



ちろる版  
鳥獣戯画



毎日過酷な労働をこなしている近所の農家では、猫の手も借りたいもんだ、と数匹が飼われている。

実際、猫も大事な働き手。お役目はもちろん、ねずみ退治。

ときどき野原でも狩猟中の猫を見かける。何かの巣なのか穴があるとそこでジッと狙い、ひょいと跳躍して獲物をしとめたりしている。

これぞ正しい猫の姿かな、と頼もしくなる。

幸か不幸か、ねずみは実はまだちゃんと見たことが無い。

一度、雪夜にねずみらしき物体を見た。実体はよく見えなかったが、多分あれはねずみだった。

雪化粧の白い道の上に、街灯で映された小さな黒い影が飛び跳ねていたのが印象的だった。



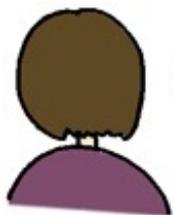
ここいらでは、夜も21時を過ぎたら深夜の静けさ。

ある晩、バス亭から自宅へ向かっていたら、サササッと動く気配が。

曲者！ハシッと見ると、そこには農家のフェンスにつかまったイタチが！

取り付いた勢いで微かに揺れるフェンス。動くに動けないイタチ君。

ゆーらゆーら。



どう見ても

君は生きている

じっと見つめる私。これがイタチかぁ。御初にお目にかかります。

死んだフリ、はたまたフェンスに一体化できていると信じているのか、素知らぬ顔で揺れに任せている。

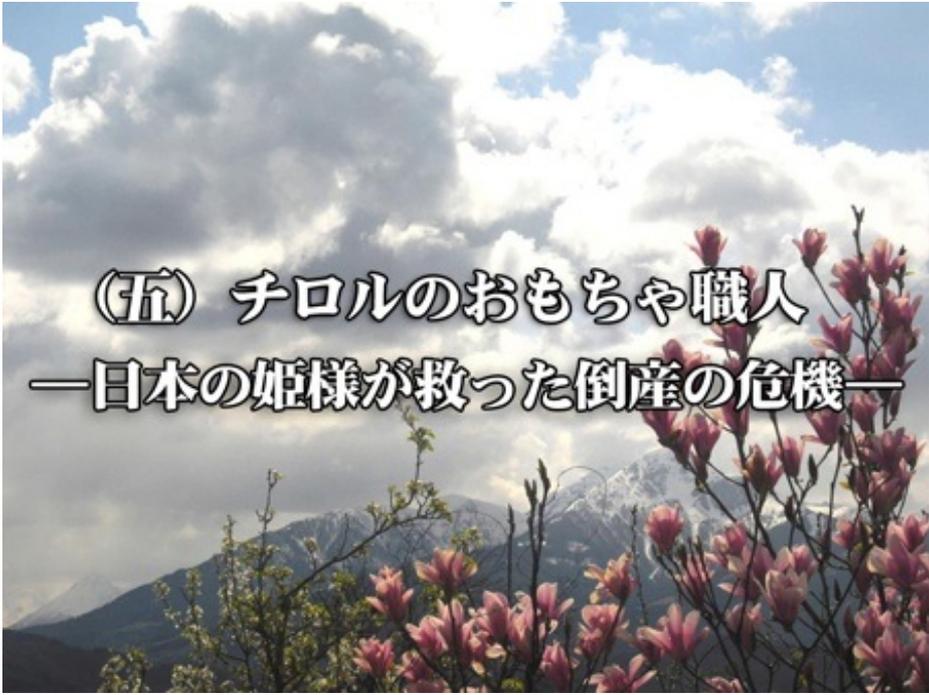
これは良いものを見た、と幸せ気分で帰宅。

しかし、後で知ったのだが、農家の人にとってはイタチは敵方だとか。

鶏を襲ったり、ケーブルをかじったりして害を及ぼすらしい。

遭遇したあのイタチ君も、どこかで悪さを働いてきた後だったのだろうか。

まあ、あんな風にかわいく知らんぷりを決め込まれたら、見逃すしかないのだけれど。



**(五) チロルのおもちゃ職人**  
**—日本の姫様が救った倒産の危機—**

犬の飼い主でもない限り、いまどきの日本のワコウドはなかなか散歩に行かないかもしれない。  
しかーし！

散歩は一大娯楽である、と声を大にして言いたい。

チロルに限らず、オーストリア人はよく散歩に出る。ちょっと天気の良いとなると、散歩人がワラワラと発生し、街中でも田舎でも「ただ歩いている」大人にいっぱい会う。



最初は、「大の大人が何が悲しくて散歩なんか…」と思っていた私である。

しかし今では、食事の後ちょっと腹ごなしがてら、と自発的に散歩ルートを開拓し、かなり満喫している。

そんなルートの一つでたまたまみつけたのが、その名も「チロル・木のおもちゃ工房」。



我らが住むチロル州インスブルックから東に向かって散歩していると、いつの間にか市外になり、ルム（Rum）という変わった名前の村に入ってしまう。人口約8千8百人の小さな集落だ。おもちゃ工房はその村の外れにあった。

一見ただの工場（コウバ）なのに、なぜ私が中を覗いてみる気になったかと言うと、扉に愛子さまのお写真が飾ってあったから。

愛子さま（当時約一歳）が、ここで作られたらしい手押し車につかまってヨチヨチされているのを紹介した記事が貼ってあったのだ。



おおっ！思いがけない所でバツタリこんにちは。これぞ散歩の醍醐味。

言ってみれば、好奇心が災いしてチロルまで流れてきたこの身。ここでひるんではミーハーの名がすたる！っと扉をたたいてみた。

すると、木のくずをまとった工房の主、フリッツ・ヴォルゴッター氏が出てきてくれた。



じゃーん！カタカタを作ったのはこの私です

実は、愛子さまがお使いになったカタカタ手押し車がチロルで作られた物であることは小耳にはさんでいた。でも、こんなご近所さんだとは知らなかった。

感激してそんな話をしていると、フリッツさん（名字が難しいので以下敬愛の念を込めて下の名で）は気さくにも、工房を案内してくれ、父上の作品を展示している二階にまで案内してくれた。



お土産に、ぬくもりたっぷりの木製のぞうまで持たせてくれ、私の心はグッとつかまれてしまった。

聞けば奥さんの名前はエミ（Emmi）さん。極東生まれの私と同じ名前。ああ！これでえにしを感じずにいられようか！！

この工房、1955年に父上が立ち上げ、1979年にフリッツさんが受け継いで以来、チロルの良質な木材をベースに、塗料も天然の素材を使い、安全で質の高いおもちゃ作りに精を出してきた。



売れ行きも評判も悪くなかったものの、そこは手工業の哀しさ。プラスチック製の安価で子供の目を惹きやすいカラフルな量販玩具に押され、会社として存続するには難しい状況が続いた。

そして、とうとう生家も抵当に取られ、倒産の危機も現実のものとなりそうな、そんな時、「愛子さまがカタカタをご愛用」という報道が流れた。

その直後から日本より注文が殺到し、てんてこ舞いの売れ行きとなった。



更なる心配は跡継ぎ問題。今年で還暦を迎えるフリッツさん。今のところ跡継ぎのめどは立っていない。

往時は30件程もあったチロルの木工おもちゃ工房も今やフリッツさんの所だけとなったそうだ。なんだか哀しい、やるせない。

でも、今時の60歳は若い。

フリッツさんも活路を開くべく、まだまだ精力的に日々新しいアイデアを練っている。理想や質をひたすら追いつける、心熱き職人さんなのだ。



ある寒い日  
温めてくれた大きな手

何年か前、某TV番組で泉谷しげる氏が孫へ贈る木の玩具を作りに弟子入りしに来ていたが、彼もフリッツさんの人柄に魅了されて、別れの時にウルルンしていたっけ。



今では時々日本から工房見学をしに足を伸ばす旅行者もいるそうだ。爆発的ブームの再来とはいかなくても、フリッツさんと彼の作品のファンがどんどん増えて、折角つながったチロルと日本の線も太くなるといいのに、と思いつつ歩く悲喜コモゴモの散歩道である。



<番外>

木工おもちゃマイスター・フリッツさんのつぶやき



## 創作中

うーん、僕の木のおもちゃでね、なんかもっとチロルと日本の橋渡しができないもんかな、と考えているんだよ。

日本はハイテク玩具の先端を行っているし、カタログなんか見てもさ、どんどん木製おもちゃの入る余地が無くなって悲しいよね。



正直言って、工房を維持していくのさえ大変だけど、僕はさ、とにかく子供達に喜んでもらいた

いわけ。それが第一。

遊びの範囲をせばめないおもちゃを作っていきたいんだ。

だって子供の想像力ってすごいだろ。

一緒に暮らすおもちゃ、って言うのかな。物だけど物以上の存在、って言うかさ。

僕の木馬を買ってくれたある親御さんがね、話してくれたんだよ。木馬の持ち主になった子がさ、寝る時に木馬に毛布かけて「おやすみ」って声かけるんだって。朝起きたら「おはよう」って。家族の一員みたいにさ起きたらそこに「居る」の。

その子の生活の中にそれだけ馴染んでいるって聞いたらさ、やっぱり嬉しいよね。



ここ数年、エコ意識が高まって、割高でも良質な天然素材の玩具を求める親も増えているって気がするよ。

木のおもちゃはさ、壊れたって直せるし、頑丈だから世代を越えて使える。それに最終的には土に戻れるんだし。安くて壊れやすく、捨てる時に罪悪感も何も起こらない物とはやっぱり違うよね。

存在感のある木のおもちゃが物心つく前から身近にあるとさ、自然の恵みや価値が体感できて、知らないうちに環境意識も高まっていくと思うんだよね。

そういうのって、これからますます重要になってくるんじゃないかな。



日本人ってさ、より良質な物を求めたい！っていう意識が強いと思うんだ。先端技術を追求する情熱の反面、自然とか昔ながらの素朴なものへの憧憬も根底にかなり強くある。

そんな日本人にさ、チロルからもっと他の形で橋渡しできないかな、と思ってさ…  
うーん、僕の玩具でさ…



マイスターのつぶやきは  
延々と続くのだった

# (六) チロルでエアロビ!?



始めてしまったのである。

エアロビクス。

私の中でどうしてもバブリーな印象がぬぐえないエアロビ。

ピチピチ・ハイレグ・レオタード。

それが、チロルで今、ひそかに熱いのである。

チロルと言えば、もちろんアルペンスキーなどの冬野スポーツの印象が強いが、一方で室内で行われる運動全般も意外と盛んなのだ。



寸胴体型、リズム感無しの私には、どう考えても向いていないと思っていたエアロビ。しかし、場所が我が家から約30歩の小学校の体育館となったら、これは行くしかない。



必要な物は、動きやすい服と運動靴、ストレッチ用マットに敷くタオルだけ。非営利組織の運営で料金も良心的、週一回1時間半×12回で約6千円だ。

これまでバスで20分かかる市民カレッジのヨガ教室に通っていたのだが、夜8時から1時間半、なんやかんやで帰宅するのは10時半頃。冬だと折角ヨガでリラックスして温まった身体が、バスを待っている間に急速冷凍状態。

段々通うのが億劫になり、やめてしまった。

ヨガも続けたかったな。



講師は  
金城武に  
激似!

さて、ドッキドキで参加したエアロビ初回。

結構盛況で総勢25名。予想以上の入りだ。

全員女性、そして年齢層は高め。

絶対70代でしょう、という人も数人。

インストラクターのカーリーナは大学出たての20代の女の子。

何人かは常連さんのようで、既に井戸端会議のおしゃべりモード。

みなさん思いのほか軽装で、私だけが長袖で浮いている気が…

留学以来、わが身に課したオキテを守り、最前列真ん中に陣取った。

言葉が分からず不安な時こそ一番前に！一見自分の首をしめているようだが、これが今まで結構役に立ってきた。



まずはウォーミングアップに軽くステップを繰り返す。身体が慣れてきたら音楽に合わせて、エアロビ特有のステップを組み合わせて踊っていく。

だんだん難易度が上がっていき、しまいにはなけなしの記憶力と反射神経を総動員してもついていくのがやっと。

エアロビって、筋トレより脳トレになるかも。

思い切り初心者なのに、最前列であたふたしている様はさぞかし見苦しかろう。そんな恥の意識もこんがらがる頭の片隅をよぎるが、そこは普通の体育館、前面鏡貼りじゃないことが唯一の救いだ。

常連参加者ともなると、インストラクターへの注文が多い。意に染まないことにはその場で抗議するのはさすがチロルの女性（おばさん共通？）。

ウォーミングアップが  
長すぎて退屈だわ



ハンナ  
(52歳・主婦)

この振り付けじゃ

無理があるから  
できないね



バーバラ  
(67歳・元教師)



初心者 エミ  
(32歳・文筆業)

意見は言うが、悪気が無くさっぱりしているのも特徴。雰囲気は終始、和気あいあい。

5回目位の時、突然違うインストラクターが来た。

今までの彼女が体調でも崩したのかと思いきや、参加者数人が運営本部に苦情を訴えて引きずり下ろした(!)ということが分かった。

その後、通算5人のインストラクターが来て、運営組織の人と一緒にエアロビしながら試されていた。初心者の私には最初のカリーナでも文句無かったのだが、こうして色んなインストラクターを試すことができ、かなり興味深かった。

ハイッ! イージー  
だろ?



唯一の男性  
フロリアン



これぞ  
エアロビ講師!  
カリン

ヒップホップ  
なノリに  
おばさんも  
タジタジ

あの人ああ見えて  
60過ぎてんのよ



一番  
トキ♡

本職は看護師さん  
ヴェレーナ

エアロビの  
深呼吸は  
手の振りが妙

お手頃価格とは言え、料金を払って自分の時間を健康と楽しみの為に費やすのであれば納得して  
できるに越したことは無い。オーストリア人はそういう面では厳しい。

それでも、ここまで強い態度は私も初めて経験して驚いた。

「自分のことは自分で決める！」という精神が昔から強いチロル特有のものかもしれない。

## TIROLER FREIHEIT



アンドレアス・ホーファー

ほかに驚いたのは、みんなの新陳代謝の良いこと。

前戯、もとい準備運動で既に発汗。

私は多分日本人としても汗をかきにくい体質だが、カリーナの時には最後まで長袖パーカーを脱がずに1時間半が終わった。

それが、お試し指導員の中で一番気に入ったヴェレーナの回では準備運動の時点でポカポカしてきて上着を脱いだ。

そしたら皆が「おーっ！エミが脱いだ、エミが脱いだ～」と驚きの嵐。

## わたし、脱いでも



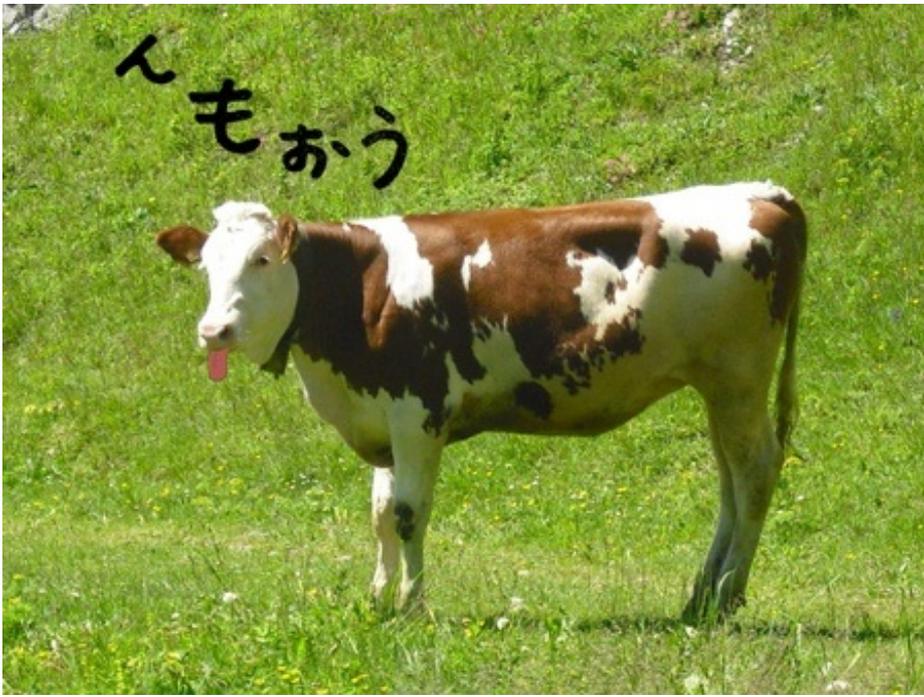
それ以降、いつ私が上着を脱ぐかが運動量（あるいは指導員の力量？）の目安になった感がある。

「エミが脱いだぐらいなんだから、結構動いたワネー。」

外国に限らず、新しい土地での生活に馴染むためには、種目はなんでも良いからスポーツを始めることをお勧めしたい。

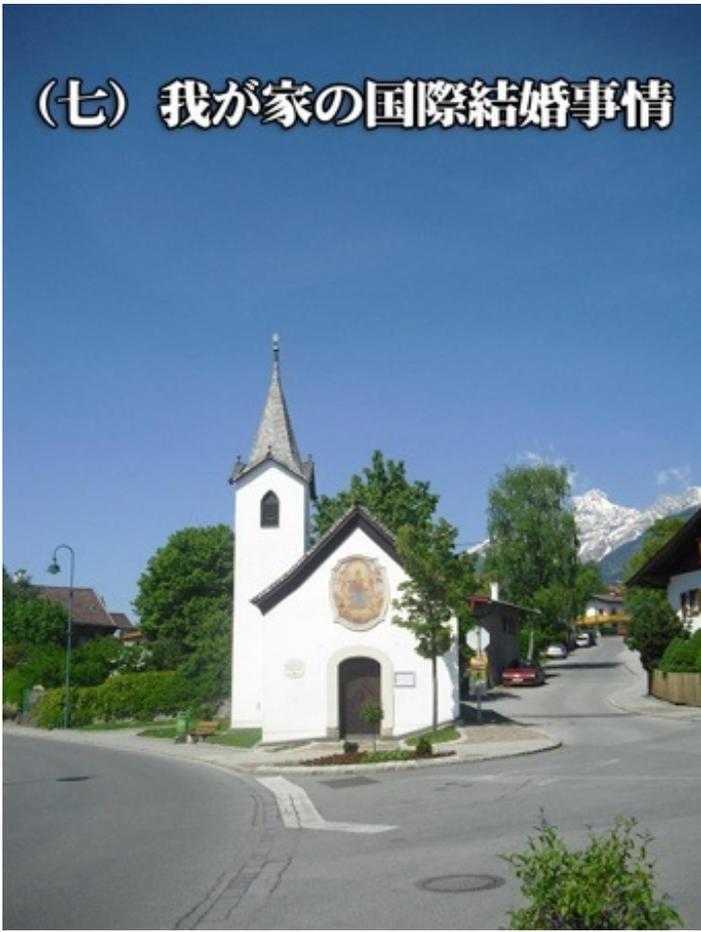
何かと緊張を強いられる暮らしの中で、体を動かせばよい気分転換になる。

その上、顔見知りも増え、現地の濃い人間模様が間近で体験できること請け合いだ。



気づけば、あなたもジモティ！

## (七) 我が家の国際結婚事情



ハンペン（夫）と私が結婚したのは、はや8年前（2002年）。

場所は当時住んでいたウィーン。



ハンペンは学生時代にウィーンと同じ寮に住んでいて知り合い、その後付き合い始めて数ヶ月で私は日本へ帰国。

約2年の遠距離恋愛を経た後、中途半端になっていたドイツ語を学ぶために再び渡奥。

その間に、今後の仕事のことや、二人のあり方を模索しようと思っていた。



遠距離恋愛って  
結構疲れます

しかし、そこで立ちふさがったのがビザの問題。

滞在許可が無いと外国人(私)は長期で居られないし働けない。どうせ一緒に居るなら籍を入れちゃう？という話になった。

じっくり将来を考えるための渡奥だったが、前提条件(滞在許可)でくじけて、あっさり将来を決めてしまった。

ああ、打算。大人の諦念…



君たちに  
ロマンは無いのか？

その夏に日本に帰国した際、役所で婚姻の必要書類を調べると、発行後3ヶ月の有効期限だとのこと。

それで簡単明瞭、3ヵ月後の11月に入籍することになった。

結婚なんてまだまだ、と思っていた24歳の私だが、今やビザ取得の手段となってしまった「結婚」は、ほとんど事務的にバタバタと決まっていた。

もともと大した思い入れもなく、書類上の手続だけでも良かったのだが、お互いの両親へのささやかな孝行として式も挙げることにした。

一人で行った  
ドレス屋さんにて



オーストリアでは、結婚式を戸籍役場で行う。書類に署名し、指輪交換といった手続を儀式として行う。

カトリックの国のため、普通は教会式もやるのだが、ハンペン是不信心者、私も典型的日本人の仏教+神道ミックスなので省略した。



30分程の役所の式を終えた我々は、その後場所を古城ホテルに移していわゆる披露宴にあたるものをやった。



とは言え、司会も居ないし他の人の様に趣向を凝らしたゲームも無しで、ちょっと改まった食事会、という程度だった。

唯一ウィーンらしかったのは、知り合いに頼んで四重奏の生演奏をしてもらったことくらいか。



揺れているだけが踊っているように見える

結婚式全体にかかった費用は衣装も含めて60万円程度だった。日本でだったら地味婚というところだろう。

でも、ハンペン側の親戚にお願いして、なるべく民族衣装で来てもらい、日本側からも数人着物で来てくれて、色とりどりのちょっとした文化交流になって盛り上がった。

## 国際親交

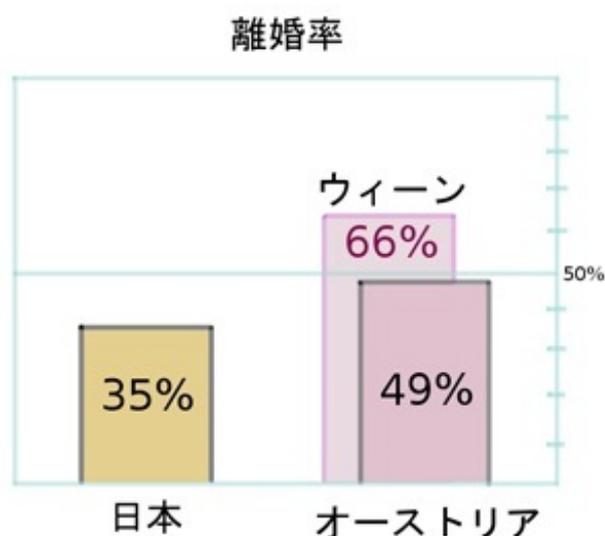


それやこれやの手続きを経て夫婦となり、めでたく就労可能な滞在許可も出た。

そして仕事にも就き、やっと自分のペースをつかみはじめた、と思った矢先。

それまで順調に働いていたハンペンがちゃぶ台ひっくり返して自己退職したのだ（チロル便第一話参照）。

その頃、折しもオーストリアの離婚率がほぼ50%になったとの統計報道が出た。  
ウィーン市だけだとなんと66%にも上る（国際的にもトップクラスの数字！）。  
街で見かける夫婦の3分の2が別れるのかと想像したら、ふいに自分達のことを心配になってきた。  
ましてや離婚率が高いと言われる国際カップル。  
二重苦である…



※相対離婚率：離婚率を婚姻率で割った数  
※日本：厚生労働省「平成21年人口動態統計の年間推計」  
※奥：Statistik Austria 2006

確かに国際結婚の方が同国人同士の結婚より障害が多いかもしれない。  
文化・習慣の違い、価値観の差、言葉の壁は大きい。

しかし、日本人同士だって違う地方出身だったら、方言も含めて同じ問題が出てきそうだ。  
逆に外国人同士の方が、その点については最初から違っていることが前提となっているから、悪く言えば「あきらめ」がついていて、その分相違点にぶつかった時も同国人同士より割と寛容に受け入れられる気もする。

むしろ、国際カップルで難しいのは、相手本人より相手の国（もしくは住む国）に馴染めるかどうかかもしれない。

どこに行ってもマイノリティーの立場は弱い。

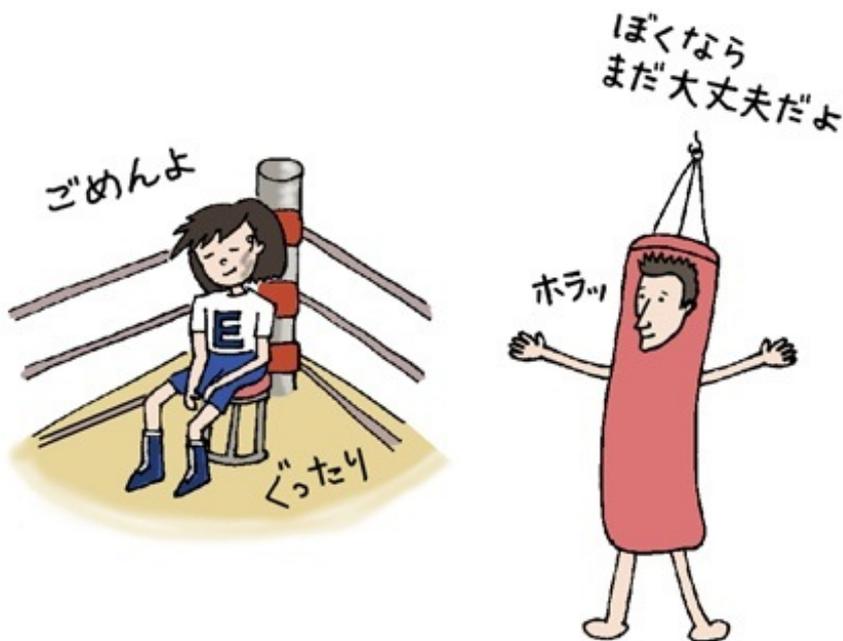
ウィーンに住んでいる間、こまごまとした嫌がらせや冷遇を受けて、よく凹んでいた。



そして、ハンペンとよく喧嘩した。いや、ほとんど私の一人相撲だったかもしれない。街で受ける理不尽な仕打ちに打ちのめされ、こんな所にいる私→いったい誰のせい?→おまえじゃーと、矛先は無実のハンペンへと向かった。

かてて加えて、貧弱なドイツ語力を総動員して私は思いを伝えようとするのに、分かってもらえないとなれば「そっちの国の言葉で言ってやってるのになんで分からないんだ! キーッ!!」と更に加熱。

あとで襲ってくる罪悪感と無力感の悪循環で私はへ口へ口。ハンペンもサンドバッグ状態。

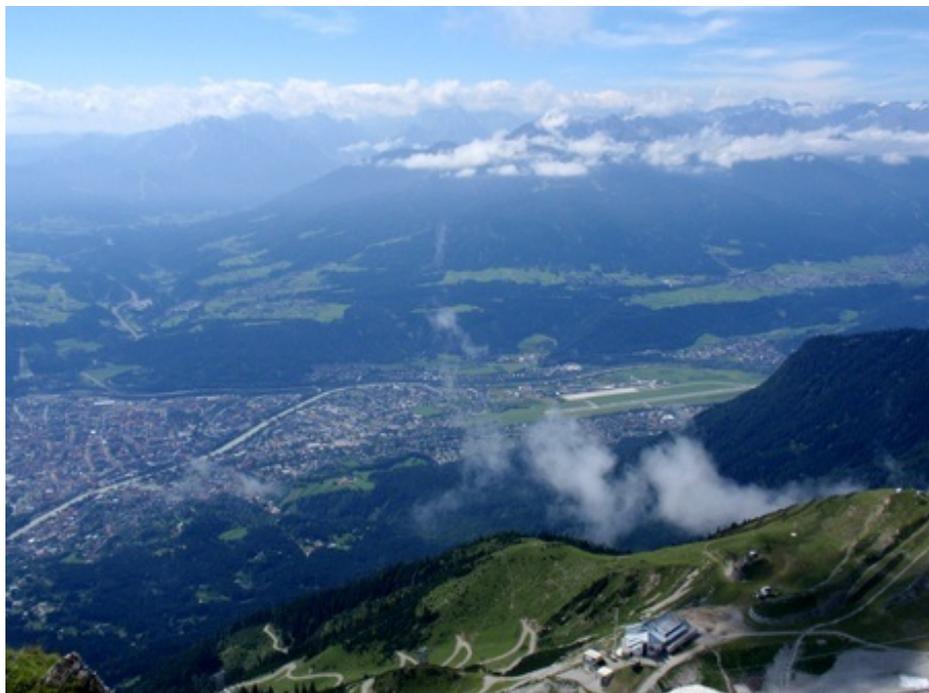


このままいったら未曾有の離婚率に私たちまでからめ捕られてしまうかも～

そんな頃、ハンペンの再就職が決まり、チロルへ引っ越すことになった。  
部外者が入る余地無き保守性と頑固さを持つ地域という前評判を聞いて、不安が募る。

幾分人間不信に陥っていた私だが、実際住んでみると、チロルの人の素朴な温かさに拍子抜けした。

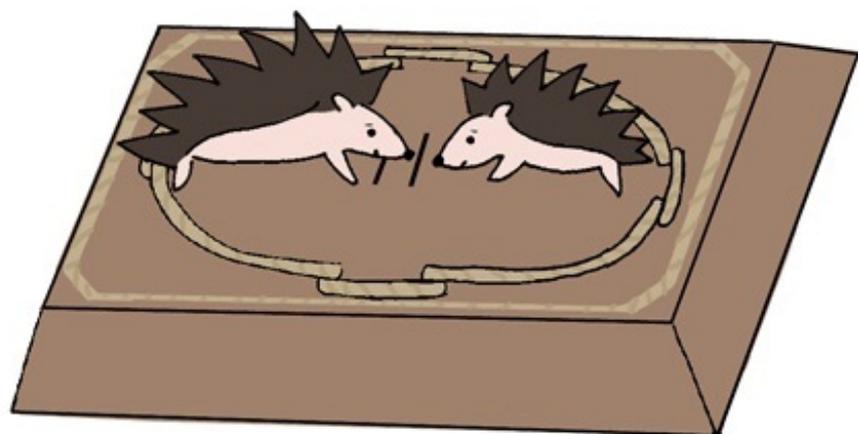
夫婦の不毛な喧嘩も激減した。



アルプスの懐の深さで社会的圧迫感も激減

ウィーンにだって勿論仲良し国際カップルは沢山いるけれど、私たちにとっては良い転機だったかもしれない。

## 仕切り直し



まだまだこれからだね…

(八) チロルからただいま！  
—ハンペン第二の故郷—



※ 今回はわたくし、ハンペンこと、チロル便著者の夫（オーストリア人です）が日本でのできごとを語らせて頂きます。



この夏、京都での学会に参加するために来日した。  
爽やかな涼風の吹くチロルから、ジメジメ猛暑の日本へ。

「8月に仕事で京都へ」と言うと、日本人は皆ウヘッと変な声を出した。  
真夏に京都？相当暑いだろうね…（哀れみのまなざし）。  
しかし、ちょっとやそっとじゃ、もうボクは驚かない。



京都には、世界各国から幾何学研究者がごっそり集結した。初来日の人も多い。皆、信号やら、駐車場の石やら何でもない物まで熱心に写真を撮っている。

そう言えば、ボクも初来日の時、駐車場にバックで駐車してしかもビシッと整列している車を見て感動したっけ（ボクの国じゃ頭から突っ込んで駐車終了）。



そう、10年前の初来日はクラクラするほどの体験だった。

事前にウィーンで、同行する男友達2人と仲良く週末集中・日本語コースに通い、一通りの礼儀作法も習ったし生活情報もリサーチしていた。



それでも成田に降り立ち、夏風（熱風）の洗礼を受けた瞬間、早くもクラッ。

到着してすぐ寄った未来の妻の実家にて、はっきりと段差のついた玄関に土足で上がってしまった。

## 玄関にて



最初の一歩で  
さっそく減点

トイレのスリッパを履いたまま出てきて居間をウロウロしてしまったし、オーストリア平均より低いドア枠に一日一回は頭をぶつけていたし（3人とも大男）、礼儀正しいつもりで「こんにちはゴザイマス」と言っていたし、駅ではキョロキョロ、自動改札でアタフタ、電車から降りてくる人の波にタジタジ…。

## 電車にて



見る物、食べる物、どれもこれも新しくて珍しい。  
驚きと新鮮さに満ちたあのときを思い出すと懐かしい。

来日5回目の今や、頭をぶつける回数もグッと減った。  
Suicaも使いこなし（3回に1回はひっかかって再挑戦しなくてはだけど）、私鉄とJRの乗り換えもお手のもの。和食も多分、一通り食べた。

知り尽くした感もあり、大抵のことには驚かなくなった。  
妻のふるさとニッポンは、我が第二の故郷と言ってしまってもそろそろ許されるかもしれない。



そんなわけでボクは初心者から見れば結構な日本通に見えるらしく、外国人研究者数人を引き連れて京都市内で食事に行くことになってしまった。

土地勘も無い所での試練。

みんな、日本的日常の食事がしたいと言う。これが結構難題だ。

そういうお店はやはり、日本人の為に作られている。外国人には分かりづらい。

そして、やってしまった。

初歩的な失敗を！



更なる試練はメニュー。

日本人による日本人の為の日本料理屋である。

達筆な縦書きのお品書き。

辛うじて読めるひらがなと、大体の値段の感じでやっと注文。

この辺でもうグツタリである。

それでも、お店の人は親切だし味もなかなか、と皆満足してくれたみたいで一安心（気苦労で何を食べたか既に忘れたが）。

この時の帰りには、考えすぎて混乱して、上がり框に靴を持ってきて、わざわざ土足禁止ラインを越えて靴を履く者まで出て、お店の人が再び「ヒッ」となってしまった。

お互い土足トラウマだ。

慣れたと思っても、日本はやっぱり難しい。

だから面白くもあるのだけど。



日本初体験のダニエル（ベルリン出身）は、街を歩いていたら建設現場でビビッと来てしまった。

「何てクールなんだ！」

どかた  
土方のかたがた



## 機能とファッション性

土方の人のニッカーポッカーと地下足袋姿にモードを感じてしまったようだ。

そこは行動派の彼。はたまた旅の恥はかき捨てるの心理か、自力で当のお仕事の方の方に声をかけ、

「それどこで売ってんの？」と身振り手振りで聞いて、タクシーを呼んで即買いに行った。

更に買った店で早速ニッカ姿となり、そのまま極々真面目な学術会議に出席していた。

強者ナリ。



モード!!

彼の好奇心は、それぐらいではまだ満たされない。

暑さで有名な夏の京都に来たんだ、折角だから日本の伝統的なアイスを試したいと、甘味処に行くことになった。

そしたらどうだ。

アイスを注文したのに、氷を砕いたやつに緑のソースがかかっている、茶色の豆まで乗っかっているじゃないか。

想定外だ。

「アイ스에 豆だぞ！」

しかも、得体の知れない、白くて丸いゴムのようなものまで乗っかっている。

「なんだこれは？こんな妙に弾力をもったモノがアイ스에 乗っかっているのっていいのって！」

ハンペン「（あ、怒ってる…）カキ氷、口に合わなかった？」

ダニエル「それが、チョーうまかったんだ！」



日本食に慣れていない上に、日本語が読めない彼らにとって（ボクだって時々）は、出てくる食べ物すべてがロシアン・ルーレット状態なのである。

そうそう、もう大概の和食は食べたと思ったけれど、今回オカアさん(妻の母) が作ってくれたサラダにクラゲが入っていたって、後から知ってギョツとなった。  
美味しかったけど、クラゲを食べちゃったって、ちょっとした勲章でしょう。  
日本人にとっては、かたつむりを食べる感覚に近いかもしれない。



ヨーロッパアルプス発

# チロル便



(九) チロルでおぎや〜!



私たちが結婚して、4年目に子供が生まれた。

4年目というのは一般的には遅いのかもしれない。実際のところ、それまでの間に「子供はまだ？」と何度となく聞かれたし、「不妊症じゃないの？」と心配してくれた親切な人までいた。

いずれは子供を、とは漠然と思っていたけれど、正直言って当時の私に子供を生む心の余裕が無かった。

先の見えぬ外国生活。稼ぎ頭のハンペン（夫）の突如の辞職。いくら慣れても外国人ということには変わりなく、ついて回る身の置き所の無さ・・・

その上、ウィーンに住んでいた頃は、なるべく痛い目に合わないようにと構えつつ、自分の足で立っているのが精一杯だった（第七話参照）。



ハンペンも「子供が生まれてもいいって感じる時まで急がなくて良い」という消極派だったし、子供全般に対して苦手意識もあったようだ。

何の因果かチロルに流れ着き、最初は戸惑いもあったけれど、少し慣れた頃にはふっと身が軽くなった気がした。雄大な自然とのんびり温かいチロルの人の中で、今までの肩の力が抜けていく様だった。



自分が親になる自信なんて引き続きこれっぽっちも無かったが、チロルに来て眉間のシワが取れてくれると、そんな事を考えて待っていても「親となる準備完了！」なんて自信のつく時期は絶対に来ない、と割り切れるようになった。

「それなら、じゃー、そろそろ」と夫婦で考えているうちに、妊娠が判明した。

オーストリアでは、かかりつけ医を決めている人が殆どで、女性の場合、婦人科のかかりつけ医も大体決まっている。私もかかりつけ一般医から紹介された婦人科に検診に行ったことがあったので、妊娠の可能性が出てきた時にそのお医者さんに行った。

まずびっくりしたのは、私の分の健康保険料の月額1万3000円程が、妊娠が確定した段階で、なんと負担額ゼロになったことだ。それだけでも、少なくとも子供が生まれてくる事を国が歓迎して支えてくれるんだ、と感じたものだ。

母子手帳で決められている妊娠中の10回の検診も出産時の入院も無料だ。ちなみに生まれてから5歳までの母子手帳内の検診も無料だし、決められた予防注射も基本的に無料。

子供が生まれれば家族補助と児童手当が出て、日本円にして合計月々6万ぐらい（当時）支給された。子供を生んだ時の経済的な負担がかかりにくい社会の仕組みに、目から鱗の連発だった。



さて、妊娠なんて初めての経験。どんな感じがするかと思いきや、最初はあんまり実感が無いもんだ。本当に誰か入って居るんですか？と信じ難く、ちょっと不安なハラ具合。

中学生の時からご飯の炊ける匂いが苦手だった私は、さぞかしつわりの時は辛いのだろうと言われてきたが、意外や意外、ほとんどつわりも経験せずに済んだ。

妊娠3カ月の検診での超音波写真に人っぽい形が見えた時には、本当に入っていたんですね！（なぜか敬語）とさすがに感動した。

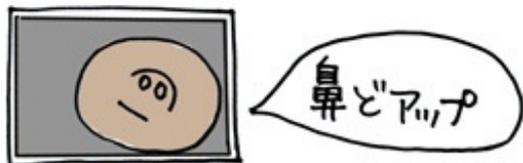


確かに入って居ました

それでもお腹もなかなか大きくなり、サイズアップすると聞いて期待していた胸の発達もそれほどでもない。検診以外の日はイマイチ実感が湧かず、慣れない感覚にすっきりしない気分だった。

親の心構え（の無さ）をよそに、お腹では着実に大きくなっている人がいて、時々不眠や貧血があったものの、順調に妊娠月数を重ねていった。

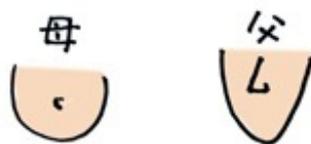
## 超音波写真



ほらー、  
お母さん似の  
鼻ぺちゃでしょ



## 新・優性遺伝の法則



鼻はぺちゃんこの方が  
優性ということか...

妊娠8ヶ月頃から、かかりつけ医に進められて週1回夜の出産準備講習に行き始めた。

ドイツ語です（当然ながら）自己紹介などが億劫で、行くまでは憂鬱だったけど、一度行ってしまえば顔見知りもできて、実際に出産する病院の助産婦さんの話は具体的で役に立った。

逆子の治療という話題の時、モクセン（Moxen）が良いという話になり、単語が分からず茫然としていると、突然「エミ、あなたなら知っているでしょ？」とふられてあたふたした。聞いてみたら、モグサ治療＝お灸のことらしいと分かってビックリした。

更に驚いたのは、妊娠9ヶ月以降数回に分けて鍼治療が大学病院で無料で受けられるとのこと。お産がうまく進む様に身体の準備を整えるそうである。欧州の真ん中で東洋医学が一般医学の中に組み込まれている（しかも保険の範囲内で！）ということにもタマゲた。

初産だし貧乏症なので、取り敢えずできることは何でもしようと思ひ、この鍼治療も受けに行った。しかし、軟弱にも針が皮膚に刺さっている状態が大の苦手の私。鍼治療ももちろん初めてである。痛さには結構強い方だけど、人のだって自分のだって針が刺さる瞬間とその状態を想像しただけで力が抜けるテイタラクなのだ。

鍼の現場は、臨月の妊婦ばかりが体操座りして順番待ちする大部屋。他の人がやられている気配で既に気分が悪くなってきた。

そして、やっと自分の番。

はり師に断って目を逸らせて貰っていたが、感覚で5・6本、あるいはそれ以上刺されたのが分かった。最後に頭のとっぺんにも一本刺された。確かに細い針で痛みは無い。刺さったまま30分リラックスして下さいとのこと。この状態でくつろぐなんて私にや完全に無体な相談でえもんだ。

数分無理やり気を逸らしていたが、無意識に髪をかき上げた時に頭に刺さっていた鍼に触れてしまった！

ひー。



別にだからどうという事は無いだろうに、針刺さり恐怖症の我が身の血液がサーっと引いていくのが分かった。

顔面蒼白。見本のような貧血。

弱々しく鍼師を呼んで鍼を抜いてもらい、最初の数分で早くも途中棄権。数回続くはずの鍼治療は断念することにした。

出産に比べたら、あんなちっぽけな鍼治療なんてなんでも無い、という人もいるが、人それぞれだから仕方ない。

順調だった妊娠期間だったが、8ヶ月目の検診で、切迫早産の危険があるとと言われて驚いた。

赤子の頭が骨盤に下がってきていて、陣痛も確認できるという。まだ肺の機能などが完全にできていない時期だから早産にならないように2週間は安静にしていなさい、とのことだった。

これが結構苦痛で、入院してしまうならまだしも、家にいてどの程度が「安静」なのかが分からなくて、外に出るのも家事をするのもコワゴワだった。

お腹の中の状況が見えないだけに不安な2週間を過ごした。



心音にしては妙だ…  
なんか異常から!?

※後日、しゃっくりと判明

その2週間をなんとかこなし、次の検診に行くと、まだ小さめだけど身体の機能は出来上がっているはずだから、もう大丈夫だろうと言われてホッとして帰宅した。

実はその時ハンペンは一週間の予定でチロルの山奥に出張中で不在だった。まだ予定日まで1ヶ月あるけれど、念の為ハンペンの母が泊りに来てくれていた。

さて、検診の日の夜、いつも通り寝たが夜中にふと目が覚めた。その途端ジワッと生温かいものが下から出てくるのを感じた。一応の知識として「破水」ということがあるのは知っていたから、これが！と一気に眠気が吹き飛んだ。

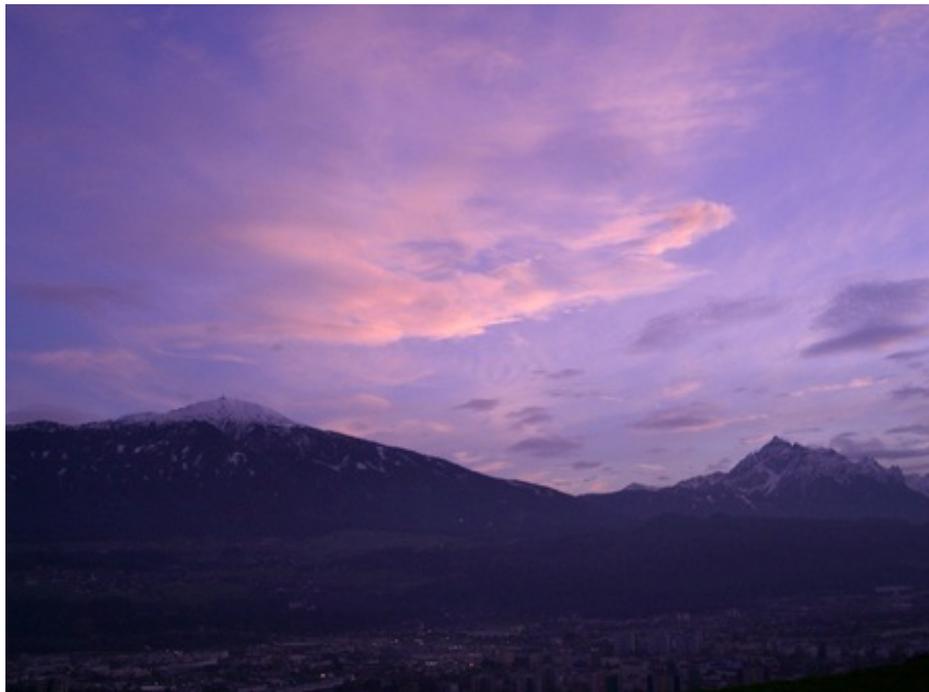
元よりハンペンは不在。自力で起きてざっと着替えて、分娩予定の病院に電話して状況を説明すると、やはり破水だから救急車を呼んでいいからすぐ来なさいとのこと。

時はまさに草木も眠る丑三つ時。申し訳なく思いつつも義母を起こして救急車を呼んでもらった。

ちなみにこれまで大きな病気も怪我もした事が無かったから救急車も初体験である。出産準備講習では、破水してもタクシーで大丈夫と言われたが、大事を取って救急車で移動させてもらった（後日これも無料だったことが判明）。

無事病院に着いて、一通りの検査もしたが、どうやら生まれるまでにはまだ時間がかかりそうだということが分かった。ちょっと休んで体力を温存しておきなさいと言われはしたが、何しろまな板のコイ、どうして休んで良いものやら。

始発のバスが動き始めてから、義母には家に帰って休んでもらう事にした。



規則正しいハンペンがホテルでの朝食が終わった頃を狙って電話をして知らせた。仕事の予定はキャンセルさせてもらって、交通の便の悪い山奥から同僚の車に便乗して病院に駆けつけた。結局陣痛が強くなるまでに時間がかかって、生まれたのは夕方だった。

出てきたのは2050gの小さな男の子。

本当にオギャーと言って生まれてきた。

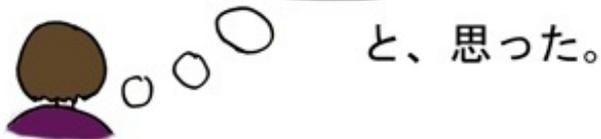
36週+1日（臨月に入った日）、ということでギリギリ早産ではなかった様だ。

小さいからか、それまでのゴタゴタで朦朧としていたのか、産む時の痛みはほとんど感じなかった。

これが本当の、案ずるより産むが易し??

# 男児と分かって

ああ、  
これぞ我が家に  
若草物語の様な生活は無いな



と、思った。

出産で一番ツライ時間は

座薬(下剤)を入れられて  
トイレまで我慢した20分だった。

大ササシの  
2個!

と、発言したら  
ひんしゆくを買った



後日、関連書物を読んでいたら、早産や破水の場合の危険について出ていて、遅ればせながら怖くなったが、とにかく無事生まれて良かった良かった。



生まれました。

(十) チロルへおいでませ



じゃーん！



今回は  
ボクの出番。

ぜひ日本の皆様にチロルまで来て  
欲しいから、ハリきってボクの個  
人（個針鼠）的お勧めチロル情報  
をお伝えしちゃいます。  
ガイドブックにはなかなか載って  
いないとっておきの情報だよ！

◆チロルまでの道程◆

乗ってしまえば  
結構近い!



日本からチロルに来るには、成田からならフランクフルトかウィーン経由でチロル州の州都、インスブルックに入るのが恐らく最短コースだね。待ち時間にもよるけど、これで約15時間。

他にミュンヘンまで（約12時間）出て、そこからチロルの目的地（家やホテルの前）まで連れて行ってくれる便利な空港乗合タクシー※1（要予約）もあるよ。

棕櫚塚（しゅろつか）家の航空券の予算は、一人往復6万～9万円ぐらいだって。

チロル州の州都インスブルックには、これまで2回開催された冬のオリンピックのお陰もあってか、小さいながら整備された空港が市内にあるんだ。

空港から街中に出るバスも、平日の日中なら1時間に4本出ているし、タクシーで街中まで行っても15分程で着いてしまうから便利だよ。



インスブルック市街に入ったら、大きな川が存在に気づくはず。インスブルックという町の名前は、「イン川に架かる橋」という意味だけあって、このイン川は街を堂々と流れている。旧市街側からイン川をはさんで向こうを見るとパステル調の家がおもちゃの様にならんでいるのが見えるんだ。

そしてその後ろにはアルプスがどっしりとそびえているのさ。よろれいひ〜♪



旧市街は本当にコジンマリしていて、街のシンボル「黄金の小屋根」のある広場からぐるりと歩いても15分程しかかからない。小さくまとまった古い街並みは、気軽にぶらぶらと観光するのに丁度良い。



お土産にぴったり♥



黄金の小屋根  
そっくりチョコ!



国民的チョコの  
ミルカは種類も豊富



※真夏は溶けやすいから  
要注意だよ!

インスブルックのバスターミナルにもなっているマルクトプラッツ (Marktplatz) には、小ぶり  
だけど室内の常設市場マルクトハレ (Markthalle) ※2があるよ。

時間や曜日によって出店する農家が違うみたい。

土地の野菜、ハチミツ、乳製品、ベーコン、ワイン、パンなどが色とりどりに並んでいるのは、  
見ているだけでも楽しい！



旅行中のビタミン不足解消に  
地元の生野菜や果物はいかが？



旧市街から南側に少し行くと冬季オリンピックでも使われたスキージャンプ台※3が見える。そしてその背景には山また山。

ウィンタースポーツに興味の無い人も、是非一度ジャンプ台の高さを体験してみて！  
入場するまでに既に小山を登る感じだけど、入ってしまえばケーブルカーでジャンプ台の建物まで行けるんだ。ジャンプ台の上に展望カフェまであるから一休みもできる。

この高さから生身の人間が飛んでいくなんて、ちょっと信じ難いよね。  
ちなみに、ジャンプ台から飛び立つ方向の下界を見ると、墓地なんだよ。  
「墓場に真っ逆さまー」ってなもんさ。人って時々悪い冗談が過ぎると思わない？

運が良ければ、夏でもジャンプの練習をしている選手に会えるかもしれない。間近で見ると、さすがに迫力があるよ。

屋上に上がれば、インスブルックの街とアルプスの山々が一望できて気分爽快！



↑よく見るとジャンパーが練習しています。

チロルを訪れたら、是非どこか高い山に登って頂きたい。

例えば、街中から新しくできたケーブルカー（フンガーブルクバーン）とロープウェイ※4を乗り継いで、楽々約20分でアルプスの山の上（ハーフェレカー山2334m）まで行ける。

こんなに楽をして別世界に行けるなんてバチがあたりそうなもんだ。

ここからの景色を見たら、日頃のストレスなんて吹き飛んじゃうでしょう。



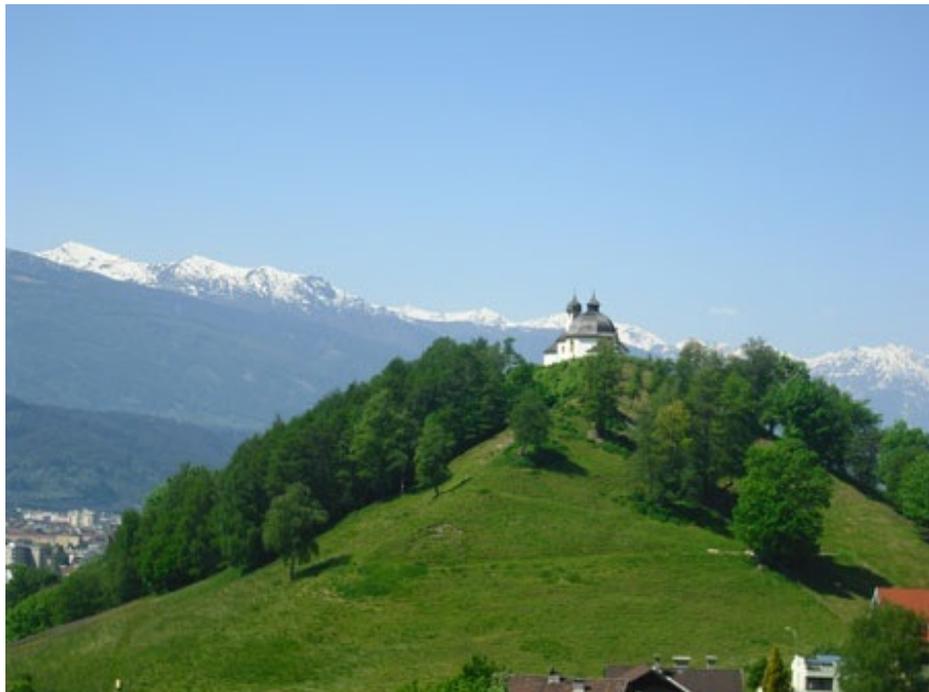
ただ、山の天気は変わりやすい。夏でも風がふいたり雨が降ったりすれば、思いの外寒くなる。甘く見ると凍えてしまうこともあるから、天候には常に注意が必要だよ。体温調節しやすい服装で、念のため上着も持っていくのがお勧め。

もっとマイナーな地元自慢をしまおうか。

棕櫚塚家と僕らが住んでいるアルツル (Arzl) という集落は、以前は独立した村だったらしいけど、今やインスブルックの町に属している。  
農家と住宅、放牧地が混在する、山間の地域。

中心街のマルクトプラッツからバスで15分程のバス停「アルツル・ヴェスト (Arzl West)」で降りると、白いチャペルが小さな丘の上に建っているのが見える。

この丘は、キリストが磔刑されたゴルゴダの丘を模したといわれていて、宗教的なシンボルとしてもアルツルの人たちは大切にしているんだけど、手軽なお散歩コースとしても人気。10分ぐらいの登り道で丘の上に出ると、またインスブルックが一望できる。ボクはここで時間を忘れてボーっと風に吹かれるのが大好きなんだ。



インスブルックから日帰りのハイキング・山登りコースは数あるけれど、棕櫚塚家の行きつけコースの目的地はその名もアルツラーアルム（アルツルのアルム）という山小屋※5。

♪ おしえて～  
アルムのモミの木よー♪  
~~~~~  
↓

山岳地帯の牧草地、  
またはそこに建てられた山小屋の意



棕櫚塚家がひいきにする理由は、ズバリ！食事が抜群に美味しいからだ。

適度な運動の後、眺望を楽しみながら、チロル名物のクヌーデル（パン等を使ったお団子）を食べれば極楽気分。新鮮なサラダと共に食べればかなり満腹、大満足。

値段は日本円にして500円ちょっとだからかなりお得だ。

団子の種類は定番のベーコン入り、ほうれん草入り、そしてチーズ入りの全三種。

お勧めはなんと言ってもチーズ団子（Kaspressknödel）。

生粋のオーストリア人であるハンペン（シュタイアマルク州出身）ですら知らなかった、チロル独特の料理。通常クヌーデルは茹でるけど、このチーズ団子は揚げ焼きにしてあるのがポイント。外はカリッ！中はもちり、チーズの濃厚な香りと旨みが口の中でふわ〜っと広がる。

棕櫚塚家はこれを知って以来、機会があればチーズ団子の食べ比べをするほどやみつきに。あまつさえ自分たちでこさえてみさえしたらしいけど、ここアルツラーアルムに勝る物には巡り会っていないんだって。

サワークラウト添え

こっちが  
シュピナート・クヌーデル  
(ほうれん草+チーズ)  
Spinatknödel



こっちが定番  
チロラー・シュパツク・クヌーデル  
(ベーコン)  
Speckknödel



これぞ絶品チーズ団子！！

アルツルから西に向かって散歩をしていけば、いつの間にかインスブルックの町境を越えて、ルム（Rum）という町に入る。ここにはフリッツさんの木の玩具工房があるよ（第五話参照）。

その工房からの道を山に向かって登っていくと、棕櫚塚家が行きつけのレストラン「カニシウスブリュンル※6」があるのさ。



標高はそんなに高くないけど既に山小屋の趣きで、家族経営ならではの温かい雰囲気だ。そしてチロル料理を中心としたメニューが、どれを取っても美味しい！。

チロルに限らずオーストリア料理は、日本人の舌にはコッテリとしてボリュームが有り過ぎると感じる人が多いそうだけど、ここはお客様の年齢層が高いからか、割と塩味も控えめで、頼めば小盛り（その分割安）で料理を出してくれるのも嬉しい。

正直言って、オーストリアの肉料理は苦手なボクだけど、ここで「これはっ！」と認識を改める感動モノの肉料理に何度も出会った。

カニシウスブリュンルとは聖人カニシウスの泉、という意味だけど、文字通り、店の外には泉が湧いていて、食事にもその湧水が添えられる。天然の美味しいお水というのは、最高のぜいたく品の一つじゃーなだろうか。

地元農家のりんごジュースやシュナップス（果物などの蒸留酒）もお勧めだ。  
お店の人に片言でも話しかけたら、もうすっかり常連気分、ご機嫌だ！



女性に一番人気の  
シュナップス（火酒）は、  
あんず・シュナップス  
（Marillenschnaps）だそう。  
後味の甘味が芳しい。  
それでもアルコール度が40%近く  
もあるから気をつけて！

食い意地にまかせて食べ物に偏った話になってしまった。こほん。

こんな風に、チロルに来たら、アルプスの山々を眺め、風に耳を澄まし、草の匂いを楽しみ、美味しい食事に舌鼓を打ち、とにかくのんびりして頂ければと思う。

インスブルックを拠点にして、軽いハイキングから登山、スキーやスノーボードなど冬のスポーツも本格的に楽しめるし、芸術観賞や買い物に興じてても良い。

野原でボーッと景色を眺めたり、日本に居てはなかなかできない気ままな散歩をユルユルとしているうちに、思いがけないチロルの顔に出会えるかもしれない。

(ボクにも会えるかも！)

あなただけのチロルを発見しに、  
是非一度おいでませ～。



## 特別付録：ハリネズミ的チロル地図



※クリックすると拡大します！（デスクトップ壁紙にもなります！）

ちなみにGoogle my map はこちら：<http://goo.gl/MLj9>

〔※1〕 4 Seasons Travel (チロル・ミュンヘン間の空港タクシー)  
ホームページ <<http://www.tirol-taxi.at/airporttransfer/index.html>> (英語・ドイツ語)

〔※2〕 マルクトハレ (Markthalle) :  
【営業時間】 月～金曜 7:00～18:30、土曜 7:00～13:30  
農家の出店は午前中のみ  
ホームページ <<http://www.markthalle-innsbruck.at/>> (ドイツ語のみ)

〔※3〕 ベルクイーゼル・ジャンプ台 (Bergisel-Schanze) :  
【営業時間】 6月～10月 9:00～18:00、11月～5月 10:00～17:00  
ホームページ <<http://www.bergisel.info/en/index.php>> (英語・ドイツ語)

〔※4〕 ノルトケッテ・ケーブルカー (Innsbrucker Nordkettenbahnen)  
ホームページ <<http://www.nordkette.com/en/top/home.html>> (英語・ドイツ語)

〔※5〕 アルツラーアルム (Arzler Alm)、標高1067m :  
【営業】 1～3月 木～日曜、4～11月 火～日曜 (春～秋の祝日は月曜も営業)  
ホームページ <<http://www.arzleralm.at/>> (ドイツ語のみ)

〔※6〕 ガストホフ・カニシウスブリュンル (Gasthof Canisiusbrünnl) :  
【営業時間】 火～日曜 10:00～18:00 (温かい食事は11:30～14:00、14:00～は軽食のみ) 予約した方が確実。  
ホームページ <<http://www.hotel-canisius.com/en-index.htm>> (英語・ドイツ語)

※以上に取り上げた情報は2010年10月現在の状況です。  
以後変更の可能性もあります。ご了承下さい。